

トマス・リードは可謬主義者か

―成り立ちと直観の問題―

中 元 洸 太

はじめに

今日、トマス・リードはしばしば可謬主義的な知識観をもつた哲学者として評価されている。とりわけこの二〇年ほどでリードとプラグマティズムの結びつきを論ずる論文が増えたこともあり、プラグマティズムにみられる動的で可謬主義的な知識観をリードに見出そうとする議論は散見される。

確かに、リードの議論に可謬主義を見出すことは容易かもしれない。たとえばリードは他の知識の基礎となるような第一原理の列挙を試みる際、自らの列挙について次のような記述を残している。

列挙は、ある人々には過多だと、他の人々には不足している、また別の人々にはその両方にみえるだろう。また、私が第一原理だとみなす事物は、他の人々にとって

普通の人々の間違いや他の真理にその証拠が由来する真理であるようにみえ、したがって第一原理ではないとみえるだろう。こうした事物についてはあらゆる人々が自ら判断しなくてはならない。第一原理における判断力があり率直な人々の一致が、数学者の幾何学の公理において一致したことが数学の発展となってきたのと同じく、知識一般の発展に繋がるだろうと説得されれば、私は喜んで第一原理の諸相のどこか、あるいは全体のより完璧な列挙を見るであろう。(EP468)

この引用では明らかに、私たちの第一原理のリストが何らかの議論によって修正されうることが認められている。

ところがこのような記述にもかかわらず、リードを可謬主義者とは認めない研究者もいる。というのも以下で詳しく見るように、リードにおける私たちの常識的信念やそれを一般

化した第一原理は、神から人間に与えられた成り立ちに基づいて生じる直観的知識にほかならないとされる。しかしもし本当に常識的信念や第一原理がこのような性格の知識であるならば、そのような知識はそもそも可謬的ではなく、むしろ修正の余地を残さない知識だと考えられるからだ。

今ここで、「知識が成り立ちに由来する直観的なものであるがゆえに可謬的ではない」という問題を便宜上「成り立ちと直観の問題」と呼ぼう。本稿の目的はこの問題に対しリードがあくまで可謬主義を認めていることを示し、彼がどのような意味で可謬主義を受け入れているのか、その糸口を見いだすことにある。以下ではまず成り立ちと直観の問題をふたりの研究者の議論からより詳細に描写し（第1節）、そもそもリードが「成り立ち」や「直観」で何を意味しているのかを確認する（第2節）。そのうえで彼を可謬主義者として擁護できる根拠を示し（第3節）、その例として彼が挙げる物体と精神の区別についての記述に目を向けたい（第4節）。

1 問題の整理

まずはじめに、成り立ちや直観といった概念を根拠にリードを可謬主義者として認めない研究者の議論をもう少し立ち入ってみてみたい。リードが固定的な人間の成り立ちを想定していることに対しては、20世紀に入って早くもプラグマティズムの祖と言われるパースが疑義を差し挟んでいた¹⁾。しかしここでは集中的にこの問題について論じたルンデスタットの議論 (Lundestad 2006) を軸にこの問題を整理して

みたい。

ルンデスタッドはリードがみかけの疑いと実際の疑いを区別した点については、彼が前プラグマティズム的な思考を持っていたことを評価する。しかし、彼がプラグマティストになれず、したがって原理的知識の可謬性を認められなかった理由を18世紀において広く受け入れられていた「摂理的自然主義」(providential naturalism) という考え方に求める。

この摂理的自然主義は大きく四つの信条から成っており、このなかには「私たちの認識能力が神から与えられた適切な目的、つまり正しい信念を生み出すという目的を持つ」という信条が含まれている²⁾。たとえば知覚能力は私たちが正しく外的世界についての信念を得るという目的が与えられている。この立場を言い換えるために私たちの知覚や記憶といった個々の認識能力から本源的に生じる信念を常識的信念と呼ぶならば、「こうした信念(常識的信念)は、それらが人間としての本性や成り立ちに固有のものであるがゆえに当然視されなくてはならない」(Lundestad 2006: 132) ということになる。

ところがこのような立場を採ってしまうと、リードの議論はヒュームの提出した懐疑主義の論点を取り逃がしていることになるという。つまり私たちの持つ信念がただ本性や成り立ちに固有だと述べ立てるだけでは、その先の議論は成り立ちに訴えるだけで行き詰まり、リードは懐疑主義の要点である「私たちの信念が正当化されていない」という事実を取り逃がしてしまうことになる。さらに、リードの常識的信念は

成り立ちに由来するがゆえに、こうした「固定化された信念群」(Lundestad 2006: 135)は批判を受けつけない。これに対してプラグマティズムは常識哲学を評価しつつも、常識を捉え直しそれ自体を疑うという常識哲学にはない批判性を持っていることから、成功するのだという。

このようにルンデスタッドは人間の本性や成り立ちに訴える議論から、リードが常識的信念について固定的な立場を採っていると考えた。今度は同じような議論を「直観」を手掛かりに捉えてみたい。戸坂は「常識」の分析」と題される論文のなかで(戸坂2007)、知覚的知識を例にリードの常識を次のように捉えている。

凡ての人が経験的に客観界の存在を信じるのが常識になつてゐるが、リードは単にこの日常経験の根拠を、人間の心に予め横たわる内的直観に求めたに過ぎなかつたのである。(戸坂2007: 73)

しかし、このような試みは大きな弱点を抱えている。リードは公理として偶然的第一原理を幾つかの命題にまとめた³⁾。しかしこれらの命題が常識の内容であるとするならば、それは「何か人間の悟性・理解力に固有な、それと共に永久不変なものだと仮定されている訳になる」(戸坂2007: 734)。そこに悟性や理性が合理的に自らの判断を修正し、常識が進歩する余地はない。最終的に戸坂は次のようにリードの常識概念を評価する。

リードの常識概念は、つまり、当時のイギリス的常識を、而も或る一定の社会層に行なわれた一部の常識を、固定化永久化し、また普遍化したものに過ぎないということが想像される。(戸坂2007: 74)

この議論からも私たちはルンデスタッドと同類の議論をくみ取ることができる。つまりリードの議論に則れば、私たちはある信念を人間の心に備わる内的直観として常識扱いたした途端、その直観によって私たちはある特定の人たちの持つドグマを常識の内容として固定化することになってしまう。そしてそのような固定化からは、人間の常識の進歩を捉えることはできないというわけだ。

2 成り立ちと直観

うえで取り上げた二人の議論はともに、リードを可謬主義者として扱う主張に対して強力な反論を提供しているように見える。こうした反論に応えるために本節では、改めてリードがどのような意味を「成り立ち」と「直観」にこめているのかを確認したい。

「成り立ち」(constitution)の語はリードの著書三冊でひろくみられる言葉である。この語は事物がまさにそれをそれ足らしめているものを指す語であり、リードはこれを実在的本質とも同一視している(see ELP 129)。うえでみたようにルンデスタッドのリード解釈では、人間の常識的信念が、まさに人間の成り立ちに由来するがゆえにそれ以上の議論を要し

ない知識として考えられたのだった。この解釈を支持する引用にはたとえば次のようなものがある。

感官の明証、記憶の明証、そして必然的關係についての明証は全て、等しく私たちの成り立ちに基づいた、それぞれ別個で本源的な種類の明証である。これらのうちどれも、ほかの明証に依存しないし、還元されえない。これらの種類の明証に反論することは不条理であり、それどころかそれらを支持する議論も不条理である。これらは第一原理であり、そのような原理は理性の領域ではなく常識の領域に属するのである。(IHM 32)

ここではたとえば私たちの感官の明証が人間の成り立ちに由来するがゆえに独自の明証となつていることが示されているようにみえる。とはいえ、こうした強い成り立ちへの信頼があるにもかかわらず、リードは必ずしも人間本性の成り立ちを明証の究極の根拠としてばかり描いているわけではない。たとえば次の引用では、リードは人間の成り立ちを、私たちの知識の根拠というよりもむしろ、知識を説明するうえでの限界として描いている(4)。

したがって教育や流行、哲学のあらゆる偏見のなかで育ってきた人にとって、神の意志としか説明を与えることができないような単純で本源的な成り立ちの原理を発見するまで、非常な注意と精神の専念を要することは疑

いない。これが真に人間の機能の分析と呼ばれるところのものである。(IHM 15: 傍点部は原文で斜字体)

もつとも知識の究極の根拠が説明の限界であることは十分に考えられる。たとえば私が「目の前に黒猫がいる」と知覚するとき、その究極の根拠は人間の成り立ちに基づき見ていることであり、私はこの知識を「私は確かにそんな黒猫を見ていて、それが人間の成り立ちだから」としか言いようがない」と説明するかもしれない。しかし重要な点は、うえの引用で成り立ちの原理は単に説明のために前提されているのではなく、むしろ発見されるべきものとされていることだろう。そして実際、リードはある現象が成り立ちに由来するものであることをしばしば積極的な議論で示そうとしている。

たとえば私たちは両眼で対象を(二重ではなく)一重に見る。この過程のうち、何が人間本性に基づく効果であり何が習慣に基づく効果なのかを検討する際、リードは次のような基準を示している。

習慣で生じたことは不使用や逆の習慣によって消え去ったり変化したりするということを一般規則として認めても良いだろう。反対に、長く続けられた反対の習慣がある効果を変えることも弱めることもないと分かったならば、その効果は習慣によるのではなく本性の成り立ちによるのだということは強力な議論である。(IHM 154)

ここでリードは、人間の持つある作用が成り立ちに基づくのだと断言しているわけではない。むしろ彼はこの基準をもとに、人間本性の成り立ちに基づくことが何かを見極めようとしている。成り立ちに由来する信念についても、同じようにリードは幾つかの一般的な基準を設けている。たとえば他人に関する第一原理について、リードは次のような例を挙げている。

私たちの周りにいる人たちが生きた知的存在者であるという私たちの持つ信念は、推論ができるようになる時には、おそらく幾つかの理由を与えることができるような信念である。しかし推論ができる前から、そして私たちがそれを指導によって学ぶ前から、私たちはこの信念を有している。したがってこの信念は私たちの成り立ちの直接的な効果であるようにみえる。(EP 467)

つまりリードの成り立ちへの訴えは単に、私たちの信念がそれに帰着するという前提に立って独断的に主張されるものではなく、ある程度私たちの信念に対して合理的な説明を与えようとした結果、至りつくものだと考えられるのだ。ここに至ると、ルンデスタッドの議論はリードの成り立ちが積極的な探求と結びついている意義を捉え損ねているのではないかという疑義が生じる。

簡単に「直観」(intuition)についても見ておこう。「成り立ち」の語に比べると、「直観」は専ら後年に書かれた『知

的能力試論』『活動的能力試論』で用いられ、その数も決して多くはない。しかし、リードにおいてこの語は次の引用で示されるように、重要な役割を果たしている。

推論とはある判断からその帰結となるような判断に至る過程である。したがって私たちの判断は先行するいかなる判断にも基づかない直観的な判断と、推論によって先行する判断から引き出される推理的な判断に区別される。(EP 542)

ここでリードは、推論によって得られる知識と推論によらず得られる知識を区別し、後者に「直観」の語を用いている。リードによれば私たちの知識は第一原理という様々な命題からなる第一原理を出発点にするのであって、彼は知識のために証明によって得られず自明な命題が必要だということを「論証」させている (see EP 467)。

こうした直観についての見方が戸坂の議論に反映されていることは明らかだろう。戸坂はまさに、内的直観によって得られるはずの諸命題がある社会層に受け入れられたドグマに過ぎないと断じたのだった。しかし、リードは単に直観的知識を直観ゆえに正しく、未来永劫不変な知識と考えたわけではないかもしれない。彼は直観の語を用いつつ、次のようにも主張している。

第一原理が論争に持ち込まれたとき、第一原理の明証が

より明白になるような方法がある。しかし第一原理はそれに特有の仕方であられなくてはならない。第一原理の明証は証明的ではなく、直観的である。それらは証拠を要しないが、適切な見方に置かれなくてはならない。(E11)

ここでリードは、直観的な知識について少なくとも特殊な形で議論をする余地さえ認めている。この「適切な見方」が何を意味するのかは曖昧模糊としている。ところが実際にリードはうへの引用の直後に「当分の間、それら(リードの挙げた原理)」が第一原理だと示されたときには、読者は守りを固め、それらが本当にその身分の資格を持つかどうかを警戒して考える」(E11, 41)ことを求める。その後様々な「当然とされるべき原理」を列挙したうえで、知覚や記憶、概念といった様々な心の働きの分析を行ったあと、彼は第六試論でふたたびこれらの原理を今度は第一原理として列挙している。ここには積極的な直観的知識の吟味が見てとれるだろう。以上に見たように、ルンデスタッドや戸坂の議論とは裏腹に、リードが「成り立ち」や「直観」の語を用いる際にはしばしば、私たちのどの信念が成り立ちに基づき直観的かを検討しようとする、探究や吟味の影がちらつくのだ。

3 精神機能の改善

成り立ちと直観の問題が生じる前提には、私たちが成り立ちに由来する知識・直観的知識をそれとして見分けられると

いう考えがある。確かにリードは成り立ちに訴えたり「直観」という言葉を使ったりすることでこのような見解に片足を突っ込んでいようにもみえる。しかし第2節では同時にリードの成り立ちや直観がその背後で探求や吟味と結びついた概念であることもまたみえてきた。そこで本節ではなぜ成り立ちや直観がリードのなかで探究や吟味と結びつくのかを検討することで、リードをある種の可謬主義者として描き出したい。

なぜ私たちの成り立ちや直観は探求や吟味と結びつくのか。まず指摘されるべきは、本稿のはじめに挙げた引用が示すように、リードは人間の成り立ちに由来する知識を実際にはそうではない間違いなどと混同する事態を想定していることだろう。だからこそ彼は第一原理のリストの改訂を容認したり、自らの挙げる原理が第一原理であることを示す際に読者の警戒を促したりしたのだと考えられる。

リードは私たちが日常抱く常識的信念についても、その曖昧さを指摘する。次に示す地図の比喻は、「私たちの持つどの信念が本源的な常識の内容として認められるべきなのかは簡単に決められない」という彼の態度を反映している。

共通判断 (common judgment) を一方ではそれを超えるものから、他方ではそれに足りないものから区別する正確な境界が何かを決定するのは難しいだろう。そしてこうした境界について意見を異にしたり、そうした境界を固定しようと夢にも思わなかったりする人たちが、この

語の意味について一致しているということはあるかもしれない。それはちょうどあらゆるイギリス人のうち、恐らく百人に一人もその正確な境界を指摘できないのに、ヨーク州で同じことを意味するということと同じくらい知性に適っている。(EIP 427)

ここで共通判断は常識と同義で用いられている (see EIP 427)。もしもリードにおける成り立ちが単に正しい信念を生み出すための究極の根拠であるならば、こうしたリードの態度は奇妙にみえる。うえのような引用は、成り立ちに由来する知識の範囲を自ら曖昧にすることで、かえって成り立ちに由来する信念の信頼性を掘り崩しているようにさえ見えるからだ。リードはさらに、成り立ちを誤謬と積極的に結び付けてさえいる。彼は判断の誤りの原因についてフランシス・ベーコンの四つのイドラを解説する際、種族のイドラを「人間の成り立ちの諸原理から生じる」(EIP 528)ものだと明言する。そのうえで彼は、このイドラについて次のように述べている。

人間の機構における活動的諸原理は、私たちの行為を方向づけるために私たちの存在の創造者によつて見事に作られていたのだが、適切な制御と抑制なしには私たちを不正に導きやすいように、私たちの成り立ちのこれらの部分については、私たちの意見についても影響を与えるのだ。(EIP 528)

ここでは明らかに、私たちの誤りの原因は人間本性の成り立ちに帰されている。そして意見における誤りを防ぐためには、私たちの成り立ちに対して「適切な制御と抑制」をとることが必要であることが示唆されている⁵⁾。人間の成り立ちが信念を生み出すかもしれないが、同時に誤りの原因にもなりうるとも考えられているのだ。

誤りを防ぐために適切な制御と抑制が必要なことに特に注目するならば、リードが成り立ちに基づく信念に対しても吟味の態度をとる手掛かりがみえてくる。人間は真に自らの成り立ちに由来する信念をそうではない先入見から区別できず、自らの成り立ちによつてさえ誤謬に陥る。そこで彼は「適切な制御と抑制」と呼ばれるように、成り立ちそのものではなく人間側の能動的なコントロールに訴えることによつて、より妥当な知識を見出す余地を残しているようにみえるのだ。

しかし、「適切な制御」ということでリードが何を言おうとしていたのかはこの文脈だけでは分からない。そこでここでは人間の制御と知識の関係を考えるために、彼が人間の知識の改善を精神機能の改善としばしばセットで考えていることに着目したい。たとえば彼は人間の能力の広がりについて述べる際、次のように述べている。

人の理性的・道徳的機能は大地そのものと同様に、生来は未開で無力な (rude and barren) ものであるが、高度な陶冶 (culture) の余地を残している。そして人間はこうした陶冶を、自らの精励を交えつつ、両親や指導者、社

会においてともに生きる人たちから受けなくてはならないのだ。(EAP 43)

(……)

有用な知識の宝物、技芸における技能の習慣、知恵・熟慮・自制そしてあらゆるほかの徳の習慣を得るうえで、人は自らの精神を大きく改善するかもしれない。人間本性を高め威厳づけるような性質は適切な尽力によって得られ、獣の状態よりも人間本性を卑しくするような性質は反対の行動によって得られる。これはまさに本性の成り立ちなのである。(EAP 44)

人間の理性的機能が陶冶を受け、精神の改善が適切な尽力によって得られるならば、それが私たちの知識に繋がるのがここでは述べられている。そしてこうした精神機能の改善と知識の改善の結びつきは、実際リードの著作の各所にちりばめられている。

たとえば子どもには「他人の誠実さを信用し、彼らが話すことを信じる性向」(HIM 196)があり、このような性向なくして子どもは他人から指導を受けることはできない。しかしこうした性向は経験に伴う理性機能の改善によって変化する。つまり、欺きの経験によって信用の原理が「制限され抑制される」(HIM 195)とされる。このことをリードは、「適切な陶冶によって成熟したとき理性は自身の強みを感じ始め、より他人の理性を待みにしなくなる」(HIM 196)とも表現する。また、人間の精神機能を分析する際にリードがその方法と

して挙げる「反省」(reflection)の働きもまた、こうした改善観と無縁ではない。リードは自らの著作における課題を人間の心の働きの分析、「心の解剖学」(HIM 12)であると考え、精神の諸機能を分析していくことを哲学の目的と考えていた。しかし、このためには「反省」と呼ばれる、「知性自らの働きを対象としてそれらに注意し、あらゆる側面から調べる知性の能力」(EB 58)が必要となる。

ところがこのような反省の能力はまず、誰もが持ち合わせているわけではない。反省は様々な心の働きのなかでも最後に開花するものであり、「ほとんどの人はそれを相当な程度まで獲得することができない」(EB 59)とまで言われる。さらに反省には様々な困難があり、「骨折りと思考の専念なくして」(EB 59)成功は見込めない⁽⁶⁾。ここでは人間の精神機能を分析した結果の知識そのものが、(少なくとも一部では)反省という精神機能の陶冶・改善に拠っていることがうかがえる。

本節ではリードにおいて、私たちが成り立ちに基づく直観的知識をそれとして確実には把握できないこと、知識の改善が精神機能の改善と深いつながりにあることを示してきた。これら二つのことから私たちはリードの可謬主義者としての側面を指摘できるのではないだろうか。つまり、直観的知識がそれとして確実に知られず、知識を得るための人間の精神機能が常に改善の余地を残す以上、こうした精神機能の改善の諸成果(たとえばより精妙な推論による反駁⁽⁷⁾や反省による分析の変化)によって、これまで成り立ちに由来すると

された知識が変更される可能性は常に残されている。だからこそ彼は自らの挙げる第一原理がその資格を持ったものかを吟味させ、将来における第一原理の改訂を容認しているのだと考えられる。リードの可謬主義はその基礎に、精神機能の改善によってより正確かつ詳細に知識が得られるというアイディアが横たわっている。

4 物体と精神の区別

ここまで本稿では成り立ちと直観の問題に対して、どのようにリードを可謬主義者として描き出せるかを検討してきた。しかし、筆者の主張に対して次のような疑問があるかもしれない。リードは確かに他人からの指導や反省・理性能力の改善による知識の改善は認めているようにみえる。しかしリードにおいて精神機能の改善によって生じる知識の変化が、本当に常識の第一原理にまで及ぶと考えられているのか、その具体例がないのではないかという疑念である。

確かに、リードは主著のなかで自身の第一原理をたびたび擁護する議論を提出するものの、彼の言う第一原理がどのように改善されてきたかを具体的には示していない。しかし私たちはこうした改善の片鱗を、『活動的能力試論』の次のような記述に見ることができるかもしれない。

未開の国々では実際に、太陽や月、星、大地、海、空、気、泉、湖に知性と活動的能力があるのだと信じている。こうしたものに敬意を払い寵愛を乞うことは、粗野な

人々に自然なある種の盲目的崇拜である。

〔……〕

少数の優れた知的能力を持つ人が思索の余暇を得たとき、彼らは哲学を始め、やがて最初は知性を持ち活動的だと信じられてきた多くの対象が実際には生命がなく受動的だということを発見する。これはきわめて重要な発見である。この発見は精神を向上させ多くの普通の人々の迷信から解放し、同種のさらなる発見へと導くのだ。

哲学が進歩するにつれて、自然の対象のなかにあった生命と活動性は退き、それらを生命のない非活動的なものにする。私たちは、それらが自発的に運動するのではなく必然的に動かされること、作用するのではなく作用されることに気づく。(EAP 207)

ここでは、一部の哲学者が学問的探求の結果、物質と精神を明確に区別するようになったという姿が描かれている。そして哲学の始まるきっかけが「優れた知的能力」という、普通の人にはない精神機能であることが示されている³⁾。

もっとも、リードは物体と精神の区別を偶然的第一原理の項目に加えてはいない。しかし『知的能力試論』の序論が「人知はそれが物体に関わるか精神に関わるか、物質的な事物に関わるか知的な事物に関わるかの二大部門に還元されるだろう」(EAP 11)という言葉で始まるように、彼はこの二元論を最初から議論の前提としている。そのため、物体と精神の区別はリードにとっては前提でも、このような発見が起こった

当時は第一原理の改訂ほどのインパクトを持つ発見だったと考えてよいだろう(9)。

さらにこの記述に前後するが、リードは他人からの指導に関する記述をも残している。

あらゆる人は、指導を受けられるようになり、粗野な人々(savages)よりも完全な仕方ですらの機能を用いることができるようになるまで、この点では「運動している物体に対し魂があると想定する点で」粗野な人々だとみなされるだろう。(EAP 206)

つまりこの区別の例は単に哲学者の発見だけで話が終わるのではない。ここでは、哲学者によって他の人々が指導されることで彼らが自らの精神機能を適切に用い、もはや物体に魂を見出さなくなる姿が明白に描かれている。この例は前節で検討した可謬主義の根拠に合致するだけではなく、リードが常識の改善をどのように捉えていたかを考えるうえで貴重な手掛かりとなるだろう。

おわりに

本稿ではここまで、リードが成り立ちや直観を訴えつつも、大きく二つの理由から可謬主義を認める余地を残していることを示してきた。リードの常識哲学が最初にみえたほど単純に常識的知識の固定化を意図していないこと、むしろこうした常識的知識の改善を容認していることは、重要なポイ

ントだと思われる。リード解釈の領域を越えて、彼の可謬主義は人間の精神機能をモデルとした常識の漸進的改善を訴える常識の理論としても読み取ることができよう。

とはいえ、本稿で取り上げられた解釈には様々な問題が残されている。最も顕著な問題のひとつは、たとえリードが第一原理の改訂を認めていたとしても、(そして進化論以前の哲学者として彼を扱うにせよ)彼の議論のなかでは私たちの知識が単調に進歩することが想定されているようにみえることだろう。たとえばうえの例でリードは物体に魂があるという立場を「普通の人々の迷信」と断じ、物心を区別するように精神機能を用いることをより「完全な仕方」だと考えている。しかし、なぜこのようなことが言えるのか、リードはほとんど説明を与えていないし、今日の私たちはおそらくこの議論をそのままでは受け入れられない。

より一般的には、このような問題はまさに彼が精神機能の改善と知識の改善を結び付けることによって生じている。リードによると、人間の精神機能が適切に用いられ改善するならば知識は改善する。しかしまさに私たちの精神機能が適切に用いられているのかどうかを私たちはどうやって知るのか。このように問題を捉えると、リードは一見して知識の可謬性を訴えておきながら、実際には可謬主義の内部に「正しく進歩してきた私たちの精神機能」という独断を植え込んでいるようにもみえかねない。このような問題に取り組むには、異なる形でリードの議論にアプローチする必要があるだろう。

【註】

(1) たとえば「プラグマティズムの帰結」においてパスは自らの立場をスコットランド常識学派と区別された批判的常識主義と名乗り、この立場の要点を六つのポイントでまとめている。このうち彼はリードが原初的信念の完全なリストを作れると信じた進化論以前の哲学者であることに言及しつつ、自らは進化論の考えに触発され、常識の世代ごとの進化を認めるのだと主張している。Peirce (1974) の第V巻、パラグラフ番号44を見よ。

(2) 他の三つの信条は、「ニュートンの哲学の規則が科学における説明の可否の基準となる」「自然法則は神の摂理的目的を表現している」「自然主義的方法を通して自然法則を決定するなかで、私たちはあるものが創造された意図や目的を発見する」というものである。

(3) 戸坂はこの論文のなかで、恐らくリードの偶然的第一原理を指して「第一一定のテーゼの形をなしたドグマ」(戸坂 2007: 73)と書いている。しかし実際にはリードの偶然的第一原理には十二のテーゼが挙げられている。

(4) Rysiew (2002) は、リードが知識の正当化を神に委ねているという見解に対して、正当化の根拠と説明の限界を区別することを主張する。彼によれば、リードは知識の正当化のために神を用いているのではなく、知識の究極的な説明のために神を引き合いに出しているに過ぎない。また、リードは神が人間を欺く可能性を少なくとも論理的には認めている。「この『触覚についての』信念とまさにその概念は等しく私たちの成り立ちの一部である。もし私たちがこ

れについて欺かれているならば、私たちは私たちをお創りになった方から欺かれているのであって、治療の方法はなし」(IHM 72)

(5) もちろんリードはここで、誤りを生み出す、言わば「欺く」成り立ちがあると考えているわけではない。種族のイドラは私たちにとって本来有益な成り立ちの原理が適切な強さで働かなかつたり、方向付けを誤ることでは生じるところで、成り立ちに由来する誤謬の原因だとされる (BIP 528)。

(6) たとえば思考が連続的に継起するものである以上、私たちはある一つの心の働きを一つの対象にし続けて精査することに困難を覚える。ほかの対象に気を取られたときには、「これらの邪魔者をなるべく早く取り除き、主要な対象に戻る」こと (BIP 69) しかない。

(7) たとえばリードは第一原理について意見を異にする人たちが最終的に合意に達するための方法として帰謬法の使用や言語が普遍的に持つ文法構造への注目などを挙げている (BIP 463-467)。

(8) これは正確には「精神機能の改善」を直接示すものではない。しかし以下の記述にみえるようにリードは哲学という営みに意識的な分析活動をあてがっており、そこには普通の人には期待されないような特殊な注意などが必要である点は指摘できるだろう。

さて、複雑な思念の異なる諸要素、そして同時に曖昧な言葉の異なる意味を明晰に区別することは、哲学者の仕事である。そして特別な出来事が要求しないとき、普通の人々がそのような区別をすることは期待される

べきではないのである。(EIP 205)

(9) もちろん、この区別の導入はリードの第一原理自体にも影響をもたらす。たとえば命題に含まれる「知覚」の対象が物質的事物に限定されることによって「私たちが感官によって判明に知覚したものは私たちが知覚したように実際に存在する」(EIP 276)という知覚の第一原理はその意味を変更する可能性がある。

参考文献

- Lundestad, E. (2006), The sceptic and the madman: the proto-pragmatism of Thomas Reid, *The Journal of Scottish Philosophy*, 4 (2): 125-137
- Reid, T. (2002), *Essays on the Intellectual Powers of Man*, in: The Edinburgh Edition of Thomas Reid (eds.: Derek Brookes and Knud Haakonssen), Edinburgh University Press
- 本稿では『知的能力試論』と略記し、引用箇所については (EIP 頁数) で示した。
- , (2010), *Essays on the Active Powers of Man*, in: The Edinburgh Edition of Thomas Reid (eds. Knud Haakonssen and James A. Harris), Edinburgh University Press
- 本稿では『活動的能力試論』と略記し、引用箇所については (EAP 頁数) で示した。
- , (1997), *An Inquiry into the Human Mind on the Principles of Common Sense*, in: The Edinburgh Edition of Thomas Reid (ed.: Derek Brookes), Edinburgh University Press
- 本稿では『探究』と略記し、引用箇所については (IHM 頁数) で示した。
- Peirce, C.S. (1974), C. Hartsorne and P. Weiss (eds.), *Collected Papers of Charles Sanders Peirce*, vol. V and VI, fourth printing, The Belknap Press of Harvard University Press
- Rysiew, P. (2002), Reid and Epistemic Naturalism, *The Philosophical Quarterly*, 52 (209), 437-456
- 戸坂潤 (2007) 『初版1977』『常識』の分析、『日本イデオロギー論』所収、岩波書店、62-92